

「男、突っ走る！」

第80回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

鬼橋	長河	熊花	石大	佐富	山前	藤野	阿山	木
頭岡	野辺	瀬木	井坂	藤永	森川	田倉	川中	内
翔直	優真	怜	麗美	麻	直啓	昇浩	武敦	雅
子政	美恵	奈忍	子央	美茜	海司	平太	久夫	也
(73)	(17)	(21)	(17)	(23)	(24)	(16)	(21)	(22)
(46)	(18)	(29)	(21)	(21)	(37)	(43)	(23)	

舞台俳優
舞台女優

『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』	『スリジエネ』
メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー	メンバー

劇団主宰者
振付師

『オフィスツリーイン』代表

1 木内家・雅也の部屋

雅也が段ボール箱を開ける――ヤシの木の写真に『デイズ』のロゴが記載された冊子がたくさん入っている。

N 「市民ミュージカルの本番まで残り三週間のタイミングで、地元のフリーペーパー『デイズ』の夏号が完成しました」

× × ×

パソコンで編集作業をしている雅也。

N 「ホッと一息入れる間もなく、『七夕物語』の販売パンフレットの制作も佳境を迎えていました。写真の編集はそれほど負担もなく、プロダクトノートも普段の稽古に参加しているため、いつどんな動きがあったのかは把握できていました。ですが、その中で一番作業に時間がかかったのが、国枝さんとヤマさんの対談ページでした。見開きの二ページとはいえ、いくら合間に写真を入れても、レイアウトを組んだらそれなりの文章量になることは事前に分かっていた

ため、対談の内容も全部で四章にも及びました。何よりこの対談ページを作る中で、一番大変なのが、テープ起こしでした。対談で二人がどんなことを話しているのかを、まずは文字に起こさなければいけません。その後、文字を再構成して口語体と文語体を混ぜながら、対談記事を書いていきます。本番まで残り三週間もないのに、こんなことをしていて良いのだろうか、とふと自分に問いかけていました」

雅也、作業の手を止めて、背中を伸ばして上を見上げる。

雅也「ダメだ……終わらない……」

と、スマホに着信がかかってくる。

雅也「（電話に出て）もしもし、ミオ？ どうしたの？」

2 カラオケ・一室

雅也が入ってくる——浩太と美央が歌っており、茜、真理恵と一緒に手拍子

をしている。

浩太「おー、うちー来た」

雅也「今日はまたどういうメンツで？」

茜「ミオがね、カラオケ行きたいって言いだして」

雅也「（マイクを持って）テスト勉強は？」

美央「もう一学期の期末終わったの」

雅也「ああ、そっか。懐かしい響きだわ、一学期とかって言うの」

茜「そっか。うちーには、もうそういうの
ないんだもんね」

雅也「ああ、学生に戻りたい」

真理恵「うちーでもそう思うことあるんだ」
雅也「そりゃそっかだよ。羨ましいよ、学生の

みんなが。（と真理恵と茜を見て）てか、
マリエもとみーも、国家試験の勉強大丈夫
なの？」

茜「今日は息抜き」

真理恵「私も」

浩太「うちー、家で仕事してたのに、よく

来れたね」

雅也「だって、俺も息抜きしたかったんだもん」

茜「やっぱり、うちーもそういうことしないとね」

雅也「地元のフリーペーパーの夏号が完成したのは良いんだけど、『七夕物語』のパンフレットのほうが全然終わらなくてさ」

茜「ああ、販売するってやつ？」

雅也「国枝さんとヤマさんの対談ページの原稿が、一向に終わらないの」

真理恵「対談ページって、作るの難しそうだよね」

雅也「ライターの俺がこんなこと言うのなんだけどさ、そのページ、誰が読むのかな」

浩太「（唾然顔で）うちー」

雅也「ページの都合ってこともあるかもしれないけど、あれ読むのかな？　こんなに時間かけて作ってるのに」

美央「そんなに終わらないの？」

雅也「見開き二ページだけど、終わりが見えない。他のページは、何となく完成に近い状態になってるんだけどね」

真理恵「それしながら、地元のフリーペーパーも作ってたんでしょ。よくやるね」

雅也「だから倒れたんだよ。あ、その節は大変申し訳ございませんでした」

茜「良いよ、うちーもいろいろ大変そうだし」

浩太「運営のほう、どうなの？」

雅也「何とも言えないよ。まあ、今は本番近いから、みんなそれどころじゃないけど、本番終わったら、また次のことでいろいろ準備していくんだと思うけど、こればかりは国枝さんが中心となって決めることだから。いかんせん、あの方は総合プロデューサーだから」

美央「何かよく分かんないけど、私は『スリジェネ』として、もっといろいろな活動できるんだったら、それで良いと思うよ」

茜「そりや私たちはメンバーだから、運営が
決めたことには基本従うつもりだけど、あ
れっと思うことには意見するつもりだよ。
だって、私たちにだってそれなりの権利あ
ると思うし」

真理恵「私たちメンバーと運営の間で、うっ
ちーが上手いことやってくれてるんだとは
思うけど」

雅也「そりやね、本番が近いから、何より円
滑に事が進むようにするのが運営の仕事だ
からね。まあそれよりも、俺は本番をちゃ
んと迎えることが一番大事だけど」

浩太「お芝居初挑戦なのに、うっちーはよく
やってるよ」

茜「私が偉そうに言えた立場じゃないけど、
この二ヶ月でうっちーすごく上手くなった
と思う。何か、自分の役を生き生きと演じ
てる気がする」

真理恵「私もそう思う」

美央「私も。あの役は、うっちーしかできな

いコミカルな役だと思う」

雅也「ありがとう、みんな。でも、みんなだ
ってそれぞれ適役だと思うよ。絶対良い作
品にしないとね」

真理恵「そうだね」

茜「うっちー、何か歌う？」

雅也「せっかく誘ってもらったんだもんね。

発声練習も兼ねて歌おうのかな」

と、曲を入れて、歌い始める。

3 大曾根駅・表（翌週）

N「翌週、僕のはっしーさんからの紹介で、
番宣を兼ねてYouTube番組に出演することに
なりました」

橋岡が待っている——雅也がやってく
る。

雅也「はっしーさん、おはようございます」

橋岡「おはよう、うっちー」

雅也「今日はよろしくお願いします」

橋岡「こちらこそ。今日は、コウタとシノブ

が来るんだよね」

雅也「はい」

と、スマホの着信が鳴る。

雅也「（電話に出て）もしもしコウタ？ うん、今はっしーさんと駅の前にいるけど。

うん、え？ どこ（と辺りを見渡す）」

橋岡「コウタたち、もう来てる？」

雅也「（頷いて）」

橋岡も周囲を見渡す——広い道路の反対側に、気づく。

橋岡「あれじゃない？（と指をさす）」

雅也、橋岡の指さす方を見る——道路の反対側に浩太と忍の姿がある。

雅也「あ、いた」

道路の反対側にいる浩太と忍が、雅也と橋岡に気が付く。

4 スタジオ

橋岡に連れられ、雅也、浩太、忍が入ってくる——司会者や、その他の出演

者たちが来ている。

橋岡「おはようございます」

雅也・浩太・忍「おはようございます」

司会者「（迎えて）はっしーさん、今日はよろしく願います」

橋岡「こちらこそ、よろしく願います」。

（と雅也たちを見て）紹介します。今日出演する『スリジェネ』のメンバーの皆さんです」

雅也「『スリジェネ』の木内雅也と言います」

浩太「野倉浩太です」

忍「花木忍です」

司会者「よろしく願います。今日は、各演劇団体さんを一組ずつ紹介してフリートークをしたり、告知をしていただきます。『スリジェネ』さんも、団体の紹介や今度の市民ミュージカルの宣伝をぜひ願います」

雅也「分かりました」

司会者「準備するので、少しお待ちください

(と撮影準備を始める)

忍「ねえ、『スリジェネ』の団体紹介って、
うっちーがやる？」

浩太「そのほうが良いよな」

雅也「だね。『スリジェネ』の結成経緯とか、
その辺の概要は俺が話す。だから、コウタ
とシノブは、はっしーさんと一緒に宣伝の
ほうを」

浩太「オッケー」

忍「了解」

橋岡「俺は、振られたタイミングで喋るから、
後は三人がメインで。あくまで俺は客演だ
から」

雅也「よろしくお願いします」

5 木内家・雅也の部屋(夜)

パソコンの画面を見ている雅也。

N「収録から数日後、YouTubeで番組がアップ
されました」

以下、パソコン画面のインサート。

6 スタジオ

司会者、雅也、浩太、忍、橋岡が並んでいる。

司会者「それでは、続いての団体をご紹介します。ましよう。この夏、パフォーマンスグループとして結成された『スリジェネ』さんよ、メンバーの木内雅也さん、野倉浩太さん、花木忍さん、そして客演として出演される橋岡直政さんにお越しいただきました。よろしくお願いします」

一同「よろしくお願いします」

司会者「この『スリジェネ』というのは、どういう風に結成されたんでしょうか」

雅也「はい。『スリジェネ』というのは、

『スリージェネレーション』つまり『三代』という意味の英語を略した造語で、孫の代まで可愛がってもらえるというコンセプトで結成をされました。メンバーは十六歳から二十九歳の男女十三人で結成されて

います」

司会者「なるほど。三世代っていうのが、良いですね。（と橋岡を見ながら）橋岡さんは、世代的には……」

橋岡「僕は違いますね。僕は、あくまで客演ですから」

司会者「客演ということ、早速本題に入りたいと思うんですけど、今回は市民ミュージカル『七夕物語』というのを上演するのですが、皆さんもう本番に向けて稽古真っ最中なんじゃないんですか？」

浩太「そうですね。僕は実は舞台が初めてなんですよ。（と雅也を見ながら）ここにいるうちーは演技そのものが初挑戦で、お互い助け合いながら、稽古してます」

司会者「野倉さんは舞台が初めてで、木内さんは演技が初めてなんですね」

雅也「お恥ずかしい話、上手下手とか、そういう演劇の知識を全く知らなかったんですよ。逆にシノブは、高校時代に演劇部だ

ったので、そういう面では心強い経験者メンバーの一人ですね」

司会者「シノブさんは、高校から演劇をさせ
たんですか？」

忍「三年間、ひたすら演劇部一筋でしたね。
今はドラマや映画のボランティアエクスト
ラにも参加してて、実は『スリジェネ』の
メンバー募集も、そのボランティアエク
ストラで知り合った方からご紹介していただ
きました」

司会者「経験者と初挑戦者が集まって、一つ
のミュージカルを作り上げているというこ
となんですけど、どんな内容のお話なんで
すか？」

忍「タイトルは『七夕物語』というんですけ
ど、本当にそのタイトルの通り、七夕をモ
チーフにしたお話で、笑いあり涙ありのス
トーリーになってるので、ぜひいろんな方
に見ていただけたら嬉しいです」

司会者「皆さんは、どんな役をやるんです

か？」

雅也「織姫と彦星が出てくるんですけど、彦星って牛飼いなんですよ。で、僕はその彦星に飼われている牛の役をやります」

司会者「牛ですか？　ちなみに、役作りとか何かされました？」

雅也「牧草で草食べてる牛の動画とか見ましたね。牛でも、乳牛じゃないですから。茶色のほうなので」

橋岡「結構、牛が本編で大活躍するんですよ。僕も今回、一緒にこの作品出演させていだいていきますけど、牛は彼しかいません。

彼だからこそできるキャラだと思ってます」
司会者「それは楽しみですね。野倉さんは？」

浩太「僕は、物語上では主人公をやらせていただくんですけど、普通の人間界に住む大學生の役をやらせていただきます」

司会者「織姫や彦星が主役じゃないんですね」
浩太「そうですね。僕が演じる大学生の青年と、付き合ってる高校生の女の子がいるん

ですけど、一応この二人が物語上の主人公になります」

司会者「シノブさんは、何の役を？」

忍「物語の舞台として、コウタが演じる大学生やヒロインの女子高生が住む人間界と、織姫や彦星や牛が住む天界と、もう一つ北極星が出てきて、北極星に住む魔女が今回悪役みたいなキャラで出てくるんですね。それで私は、魔女に飼われてる犬の役を演じます」

司会者「牛とか犬とか、動物も結構出てくるんですね」

浩太「あと猫と鳥が出てきますね、動物だと」

司会者「七夕と一言で言ってますけど、相当スケールの大きいお話になりそうですね」

雅也「ぜひ、生でそのスケールをご覧いただければと思います」

司会者「橋岡さんは、今回客演で特別出演をされるそうですけど、何の役をされるんですか？」

橋岡「僕はですね、織姫の父親で、この世界を作った天帝様を演じます」

司会者「似合いそうですね、はっしーさんの天帝」

橋岡「そんなに出演はないんですよ。あくまでメインは、『スリジェネ』のメンバーですから」

司会者「少ない出演でも、はっしーさんの演技にも注目ですね」

7 木内家・雅也の部屋（夜）

パソコンでYouTube番組を見ている雅也。

N「このトーク番組で一番嬉しかったのは、はっしーさんが『牛は彼しかいません』と仰っていただいたこと。配役が決まったら、時折自分にこの役が務まるのだろうか」と自問自答したり、ヤマさんに相談をしていただけない、この時の言葉はとても自信に繋がり、改めて、自分にしかできない役を演じてみせると心に決めたのでした」

8 南公民館・会議室

N 「本番まで、稽古日数は数え切れるところまで来ており、ひたすら通し稽古を重ね、直すべき箇所を部分的に稽古するという繰り返しでした。当日、音響オペレーターは振付の阿川さんが担当することになりました」

通し稽古をしている雅也、浩太、昇平、啓司、直海、茜、麻美、美央、麗子、忍、怜奈、真理恵、優美、橋岡、翔子——演出席で見ている山中。音響のセッティングをしている阿川。

山中「では、冒頭から順番に通し稽古始めていきます。皆さん、スタンバイ良いですか？」

一同「はい」

センターの椅子に座っている翔子、その下で体操座りをしている麻美と忍。

山中「じゃあ、冒頭の翔子さんのプロローグ

のところから行きます。よーい、スタート」

翔子「むかし、むかし。天の世界には、織姫様と彦星様という方が住んでいました。

天の世界の人々は、不思議な力を持っていたました」

忍「(孫の役で)おばあちゃん、不思議な力って、何？」

麻美「(孫の役で)織姫と彦星って、確か一年に一回しか会えないんだよね？」

翔子「そうよ。実はおばあちゃん、昔、天の世界に行ったことがあるの」

忍「本当に？」

麻美「すごい！」

翔子「今でも覚えてるわ、あの不思議な出来事を……」

山中「はい、暗転」

翔子、忍、麻美が上手にはける——入
れ替わるように麗子、怜奈、美央が入
ってくる。

麗子「織姫様？」

怜奈「どこですか、織姫様？」

美央「織姫様！ どこにいますか？」

N「本番が近づいていく様を、僕は稽古の中でひしひしと実感していきました」

9 木内家・雅也の部屋

段ボール箱を開ける雅也——『七夕物語』のタイトルと、浴衣を着たメンバーの集合写真が表紙になっているパンフレットの束が入っている。

N「本番の一週間前、制作に時間のかかっていた販売用パンフレットがついに完成をしました。国枝さんと相談のうえ、このパンフレットは当日五百円で、受付で販売することになりました。制作物が無事に完成したことで、僕はこれで演者として、心の準備ができるようになりました」

10 商店街

露店や出店がたくさん出ており、来場

客であふれている。

N 「週末の金曜日から、ついに商店街の夏祭りが始まりました。本番前日である土曜日には、地元のケーブルテレビの生放送で十五秒の宣伝告知をするために、メンバー一同で出演したのち、公民館で最後のリハーサルをしました」

11 中央交流センター・表（朝）

人気がない中、雅也がやってくる。

N 「そして八月五日、日曜日。とうとう、本番当日となりました」

つづく